社人研ディスカッションペーパー(DP)
「人間関係の希薄さに関する研究のレビュー」に関するコメント

2020 年 4 月

日本福祉大学 斉藤雅茂

本稿は、社会的孤立など「人間関係の希薄さ」に関わる言説およびこれまでの知見を集約した貴重な論文です。デュルケームの自殺論をはじめ、社会的孤立・孤独概念の整理および主要な研究のレビュー、また、人間関係の構築・維持のための新しいツールである SNS に注目した最近の研究動向と非常に多方面にわたって網羅的に取り上げられた意欲的な論文といえます。以下、これまで高齢者の社会的孤立研究に携わってきた立場から気づいた点をコメントさせて頂きます。

１．本レビューの対象について

レビュー論文という意味では、今回どういった基準（条件）で先行研究を収集されたのか、どういった研究を対象にレビューをするのかという点を明示すべきであると考えます。その際に、本ペーパーの性質を考慮すると、国内の研究および知見についてももう少し取り上げられた方が有益であると考えます。社会学系の研究ですと、原著論文ではなく書籍として刊行されるものも多いと思われますし、最近では海外のジャーナルに投稿された日本の研究成果は少なくないと思われます（たとえば、Sakurai R. et al. (2019) Int Psychogeriatr. 31(5):703-711、など)。

２．社会的孤立研究の古典について

10 頁にタウンゼント（Townsend）の記載がございます。ただ、社会的孤立研究の古典という文脈では、タウンゼントもさることながら、タンストール（Tunstall）の"OLD & ALONE: A sociological study of old people"も同程度によく知られている古典的な研究です。注書きで一言触れてあるものの、引用文献にすら含まれておりませんでした。本稿の目的にもよりますが、文献対象の網羅性という意味でやや疑問が残りました。

３．社会的孤立尺度について

「最もよく使われているのは LSN スケールである」という記載・主張（12 頁）にはやや違和感がございます。そもそも社会的孤立の操作的定義についてはこれまでのところ標準的な方法は確立していないと理解しております。そうした中で、個人の社会的孤立の「度合い」を測定する尺度の開発がいくつか試みられており、LSN スケールはその一つといえます。しかし、いずれも何点以上ないし未満が孤立状態に該当するのかという合成得点のカットオフポイントについての理論的および統計的な根拠は乏しいです。実際に、タンストールはカットオフポイントをどこに設定するかは独断的にならざるを得ないと自ら限界としています（Tunstall 1966)。同一指標であっても調査によって異なるカットオフポイントが採用されていたり、同一基準を他の調査データで適用したところ、高齢者の 8 割が孤立状態に分類されてしまい、カットオフポイントの妥当性に課題があること（Victor et al. 2009）も指摘されていたりします。このため、尺度得点（合成得点）ではなく、単一の変数、もしくは、複数の変数の組み合わせから孤立状態を操作的に定義した研究も少なくありません。たとえば拙稿（斉藤ら 2015）では、あえて多次元的な指標ではなく、他者との交流頻度に限定して、要介護・死亡リスクとの関連を検証し、

週 1 回未満からが要介護リスクになる孤立状態であること、月 1 回未満だと死亡リスクにもなる深刻な孤立状態であることを指摘しております。本稿のように、合成指標のみに限定した議論は（たとえ一部で多く引用されているとしても）誤解を生むのではないかなと危惧致します。

（参考）

Victor C. Scambler S. & Bond J. (2009) The social world of older people: understanding loneliness and social isolation in later life. New York: Open University Press.

斉藤雅茂 (2018)『高齢期の社会的孤立と地域福祉；計量的アプローチによる測定・評価・予防策』明石書店

斉藤雅茂・近藤克則・尾島俊之・平井寛 (2015)「健康指標との関連からみた高齢者の社会的孤立基準の検討；10 年間の AGES コホートより」『日本公衆衛生雑誌』62(3): 95-105.